

李通玄の文殊観

特別研究員 稲岡智賢

李通玄の華嚴思想の特色の一つとして、三聖（毘盧遮那仏・文殊・普賢）の円融思想が挙げられることは、彼の著作を繙く時、容易に首肯できよう。そこで今回は、その三聖円融の思想の有意が何処にあるのかをより明確に探る為に、まず第一段階として彼の文殊についての見解を闡明しようと思うのである。

李通玄が文殊に対して大乘般若空智を代表させ、かつ「信」に重要な意義を有する菩薩としての解釈を施していることは、その大筋に於て、賢首法蔵のそれと大差はないといえる。しかしその説得の方法には彼独自のものがある。殊に易を用いての説得方法は他に類例をみないといえよう。

(文殊) 為_レ啓蒙發明之首_一 故為_レ小男_一 主_レ東_二北方_一 為_レ長_一 卦_一 艮_二為_レ小男_一 (③36・739 a)

とは、その好例であると思われるが、このような解釈は単に文殊に限らず普賢等にも与えている。今は文殊にのみ限って検討することにしたいが、一体このような解釈方法の真意は何処にあるのであろうか。確かに居士としての伝統教学に執られない自由な立場が、彼の生涯を通じての思想環境を反映させた結果であると推察することは間違いないであろう。しかしそうした彼の思想背景の問題と同時に、彼自身の中での思想的必然性を鮮明にしなければならぬことも亦事実である。その点で文殊を艮卦に配し、東北の主として位置づけ、小男と規定するこの破格の解釈の意は、

彼の華嚴経解釈の上に思想上いかなる要求に基づいたものであるのか明確におかねばならない。信心を成就せしめる菩薩、即ち「創蒙_二発心_一」(③36・950 a)と積される文殊は「金色世界」(③36・721 a)より来訪するのであるが、その世界は「不動智仏」(③36・808 b)を主となす。不動智仏は「根本普光明智」(③36・870 a)とも「無依住智」(③36・773 c)とも表現され、その思有した文殊は「根本智」(③36・938 a)を表現する菩薩と解釈される一方「理」(③36・740 c)「法身妙慧」(③36・745 a)等を表す菩薩ともされる。結果、文殊は智を代表するといっても「無想背景を性」を根幹とした「無依住智」に気づかされるものとして解釈され、それが「法身妙慧」といわれる所以にもなる。即ちこのよう立場なにして示される智は、徹底してその無性を強調され、無性なるが故にこそ却って信成就の基点を与えることとなるのである。例えば

如_二人_一因_レ地_一而倒 因_レ地_一而起_一 一切衆生因_二自心根本智_一而倒 因_二自心根本智_一而起 (③36・812 b)

と「地」に喩えられるそれは具体的には

一切衆生迷_二根本智_一而有_二世間苦樂法_一 (同右)

と、余りにも大胆な苦樂の構造の説明を以て明瞭に示される。是故に彼に於ける信は

直信_二自心分別之性_一 是法界性中根本不動智仏 (③36・809 b) のところに初めて成立することとなり、応に李通玄に於ける華嚴経の信心とは

此教法界乘中以_二根本智_一為_二信心_一 (③36・809 b)

でなければならぬこととなる。そしてこの信を成就せしめるのが彼に於ては文殊であった。しかしその文殊は小男と規定される。

初発心時便成正覚の思想を唱える彼(因36・76b)が何故文殊を小男としたのか。

易(説卦伝)に於て艮卦は、東北と小男の意を有す。確かに東北は彼が

表平旦創明暗相已無日光未著(因36・73a)

というように「万物之所成終而所成始」(説卦伝)であるから、信位を代表する文殊を表すには格好かも知れぬ。しかし彼が以果成信の經とする名号品に於ては、文殊は東方より来る。では易の卦のみを採用して東北としたのかといえ、必ずしもそうとはいえず、恐らく菩薩住処品(因10・24b)に依つたものと思われる。確かに東方より文殊が来たことに対しての彼の見解は見出し難い。がしかし、東方というものの「一切処文殊」と、同じく以果成信を表すとする光明覺品に多出する語を以て、これに「明法身遍」(因36・73a)と解釈していることから察すると、この東方は一切処の内での東方と解していたともとれる。その点では達見でこそあれ矛盾はないといえるのではなからうか。

では次に何故小男となしたのか。参考迄に普賢は長子であり東方に位している(因36・73b)のであるが、この点はどう理解すべきであろうか。三聖円融を説く彼に於て(因36・73b)両者に差があるとすることはできない。彼は小男を

以_レ長_レ為_レ山 為_レ小男_一 為_レ童蒙_一 因_レ行所化_二而立_レ名(因36・103c)

という。ここに彼の文殊を小男と規定する意は、文殊は小男を啓蒙するといふ意に於て小男となしたといえることができよう。確かに信位に配される点で文殊は小男と規定されてもよいかもしれぬ。今その義を確認する為、長子普賢をみてみよう。普賢は

普賢即為_レ始見_レ道之後行_レ之門_一(因36・73b)と規定される。そして具体的には

乘_レ法界乘_二行_レ普賢行_一 以_レ治_レ習氣_二安_レ立_レ次第_一(因36・95c)という文こそ普賢に代表されることとなる。

その点で、次の彼の

三界無明一時頓尽 唯有_レ習氣煩惱_一 漸漸以_レ法治_レ之(因36・827a)

無始正使無明 十住初発心見道一時総断 習氣煩惱漸漸微薄 仏果方終節級次第(因36・1021a)

の語は、この両者の立場を説明して尚余りあるものとなる。この点から察する時、文殊小男とは信成就の意に於ていわれ、普賢長子とは文殊に依つて信成就した者を撰化する意に於ていわれるとしてよいであろう。勿論「地」喩を以て智の無性を主張する彼は、

無明及智 無_レ有_レ始終_一 若得_レ菩提_二時無明不_レ滅(因36・813a)といひ、故にこそまた文殊は

如_レ去_レ世_一 文殊師利猶在_レ世間_一(因36・813c)

と永久にその不変性を示し、或いは普賢を「用」に配するに對し、文殊を「体」に配する(因36・941c)などの独自の解釈をみせる。今これらの見解と相待つて、普賢長子に對して文殊小男が規定される時、三聖円融思想に基づく彼の独自性に富む文殊觀が浮び上るといえよう。

尚、こうした無性の智を以て示される基本構造の中で、童子と表現される文殊を小男とするのみならばともかく、普賢長子と對にして言表されたことは、賢首法蔵の般若門、法界門への配當(因35・451a)と比する時注目すべき相違点が浮び上ってくるが、この点も李通玄の文殊觀の独自性が一層のものとなるところである。